「あ……っっ、やめ…っ、」

ぞくりとした感覚が脇腹を這い、燕尾服の少年は身を縮めた。
主人の部屋へと続く階段の麓。左手にある広々とした踊り場の大窓から、春のやわらかな日差しが降り注いでいる。

「こら。声を出しては人に聞こえますよ」

背後の男はそう言って、少年のシャツの下に潜りこませた手でなめらかな肌の感覚を愉しんでいる。
少年は震える痩身を階段の手摺りに預け、立っているのがやっとだった。

紅色の絨毯が敷かれた古い階段は、少年のいる場所を境に折り返している。下の階へと伸びる階段の踏板(ふみいた)に立ち、上階の主人の部屋へと伸びる階段の手摺りを雑巾がけしていたのが、つい数秒前までの話だ。

「どうしたんです？掃除の手が止まっていますよ。私も手伝いますから、一緒に頑張りましょう」

男の細長い、けれど繊細で器用そうな手が伸びて、雑巾の上に置かれた少年の手に重なった。たったそれだけの刺激で、びくりと全身が跳ね上がりそうにな

る。

この屋敷の執事見習いになって一ヶ月。

幼くして働きはじめた少年には、特別教育係という名目でベテランの指導者がつけられていた。それが今背後にいるこの男だった。

面立ちは美しく、言葉遣いやマナーは執事として完璧。主人だけでなく仕事仲間に対しても常に礼儀正しく、何をやっても手早く丁寧。一見非の打ちどころのない男に見えた。

この男が何かにつけ人目を忍び少年を性的に籠絡するなどと、一体だれが思うだろうか――。

「フフ……。ご主人様の部屋はすぐそこなんですよ。声は抑えましょうね」

いやらしい手つきであばらを辿られ、長い指の先で片胸の頂きをつつかれる。

「……っあ、」

花芽のようなそこをくりくりと捏(こ)ねられれば、痺れるような疼きが胸の奥底へ落ち、下半身のあられのない場所までもがなぜか兆しはじめる。どくどくと下半身の血管が脈打ち、徐々に頭が霞(かす)みはじめる。この男に触られるだけで、全身の力が抜けていく。

「まだ乳首(ここ)しか触っていないのに……こんなに震えて……、」

耳元に甘い息がかかり、ぞくりと背筋が撓(しな)る。

「ここを弄ったら、一体どうなってしまうのでしょうね？」

「！ぁあ……っ、」

ここ、と言いながら男は少年の下半身に手を触れる。
少年の体のサイズに合わせて作られたスラックス。上質な布ごしに、男の長い指が、絡みつくように少年の中心を撫でる。

「ぃ……っ、いやです……、やめて……っ、」

耳まで熱くなるほど、恥ずかしい。
この屋敷へ来てこの男に触れられるまで、少年はこうした戯れに関することを何一つ知らなかった。
執事の仕事のみならず躰にまでいろいろ教え込まれた今なお――、心根の純真な少年にとって、この男にされることはあまりにも刺激が強い。

「『いや』？本当ですか……？」

男はもはや、掃除を手伝うという体裁を繕わなかった。

片方の手で少年の胸の突起をやわらかく捏ね、もう片方の手で下肢の中心を服の上から撫でさする。

「…ぁ、ぁあ……っ♡、ぁ……、」

「本当は嫌なんかじゃないんじゃないですか……？ほら、もうこんなに……、」

男の手つきは徐々に大胆になって、特に局部のほうを掴んだ手は、撫でさするというより揉み込むような動きになってきている。

「…う……っ♡ぁあ……っっ♡♡♡、」

「こんなに敏感に感じて頂けるなんて、嬉しいですよ……」

耳元の囁きは優し気なのに、少年をまさぐる手の動きは烈(はげ)しくなるばかりで、頭が混乱する。男の言葉遣いや口調は、どんな状況にあっても変わりがない。遥かに後輩の少年と二人きりのときでさえ言葉遣いは乱れず、手つきだけがいたずらな積極性とときに攻撃性を秘めて少年を追い詰める。

「ぁあ……ッ♡♡♡、」

局部が熔け崩れていくのに気をとられていると、胸の突起を強めに摘まみ上げられ瞠目する。
大袈裟に跳ねた腰を見て、耳元の息が小さく笑う。

「ところで、前もお聞きしましたが……このお仕事はいつまで続けられるおつもりですか？」

「……っ、」

「前から申し上げていますが……あなたさえ良ければ、私が生活の面倒を見てもよいのですよ。ここで執事などにならなくとも……」

頭の芯までもが蕩(とろ)けはじめる。
この男の声は甘い毒のようだ。吐息交じりの低い声が、聞く者の脳内に妖艶な色を纏って染みわたる。
思わず首を縦に振ってしまいそうな自分に気づき、少年は慌てた。
こんな男の世話になって暮らすだなんて、とんでもない。仕事はできるし物腰も柔らかだが、自分のような子どもに手を出すような男だ。しかもここは職場で、自分は仕事仲間なのにだ。この男が誰にでも丁寧なのは、物事の分別がひどく曖昧なことの裏返しなのではとすら感じてしまう。
というより、実際そうなのだろう。

「何を考えているんです……？」

「！ぁあぁ…っ♡♡」

咎めるように脚の間のものを強く揉み込まれ、淫猥な痺れが臓腑を駆ける。
びくびくと跳ねる少年の腰に構わず、男は少年のスラックスの前ボタンに手をかけた。細(こま)やかな作業の得意な彼の指は、片手でもあっという間にそこを開け広げてしまう。

「だ…っ、だめ……、」

「だめなら逃げればいいでしょう？」

意地悪な吐息が耳元でかすかに笑い、下着の布さえも暴いた指に熱持つ中心を探り当てられる。

「ぁ、……ぁ♡、……っ、ぁあ……、♡」

密かな期待に震えていたそこは、直に触れられたそれだけの刺激で敏感に快楽を拾い上げる。

「まあ、こんなふうになってしまっては……、人のたくさんいる下の階には戻れないでしょうね。今楽にして差し上げます……」

意地悪を言ったかと思えばこちらの言い訳を用意するあたりに、この男とは拭い去れない歳と経験の差を感じる。――などと感心している場合ではないのだが、少年はもはやすっかり男のペースに飲まれていた。
今日も今日とて、逃げ出すタイミングを失った。
こんなに頻繁に襲われていて、今まで誰にも見とがめられていないのが不思議なくらいだ。

「ぁあ…っ♡♡♡」

あろうことか、男の指は少年の幼いそこを衣服の外へ掴み出してしまう。外気に触れた幼茎にぞくりと震えがはしる。

「あっ…♡♡ぁあ……っっ♡、」

「はやいところ射精(だ)してしまいましょう」

硬くなりきった竿を男の長い指に包まれて、上下にゆっくりと擦られはじめる。

「は…ぁ……♡、ぁあっ♡♡、ぁあぁ……っ♡、だ…っめえ……っっ、！」

直接的な刺激に、いよいよ腰から下が熔け崩れていく。
なにか危機を訴えかけるように脳へ打ちあがり続ける刺激は、烈(はげ)しくも甘く少年の意思をなし崩しにした。

「おや？今日は濡れるのはやいですね」

「っひ、♡♡」

ゆるゆると上下していた男の指先が唐突に先端をつつく。
零れ出した透明な雫を繊細な指遣いで絡めとられ、指先で先端部分を撫でまわされる。

「あぁあ……、っ♡♡♡♡」

神経を直に触られるような感覚に、全身が総毛だつ。
これ以上はもうたまらないと、白いうなじを晒して悶えるも、男が少年を離す様子はない。

「ひ…っ♡♡♡あ♡♡、ぁあ……っ♡♡♡♡」

男はぬめった液を纏わせた指を、再び竿へと戻す。

ぬちゅ、ぬちゅ……、と淫靡な水音が響く。男の手が再び竿を行き来して、あまりの気持ちよさに下半身ががくがく震えるのを止められない。液を纏ったぶん滑(すべ)りのよくなった男の指に、熱くなりきった屹立を何度も責め立てられる。

「…ぁあ♡、……あ♡♡、ぁあぁぁ♡♡、ぁ♡、」

男の手は徐々に速さを増しはじめる。

少年の下半身から、ちゅこちゅこちゅこ……、と連続で卑猥な音が響き、それが恥ずかしいのにますます躰の芯は昂(たかぶ)っていく。

「あ、ぁあ…っっ♡♡も…だめ……っ♡だめえ……っ！」

このままでは本当に射精(で)てしまう。

こんな場所を――屋敷の主人の部屋の傍(そば)を自分の体液で汚すなんて、許されない。か細い手をようやっと伸ばし、男の手首を掴んで抵抗しようとする。けれど快楽に熔け切った少年の腕は弱く、この男を止める力などありはしない。

「ぁあぁぁあああ……っっっ♡♡♡♡♡♡」

どくん、と一際大きな脈動に下肢を覆われ、少年はあっという間に昇りつめた。

男の手に包まれた幼茎の先端から、勢いよく白蜜が散る。

躰の芯が引き絞られる感覚に、思考が白んだ――。

「たくさん射精(だ)せましたね。では、次は……、」

こちらで気持ちよくなりましょうか、という声を快感に霞んだ意識の遠くに聞く。少年が言葉の意味を理解するよりはやく、男の手は少年のベルトを瞬(またた)く間に外してしまう。足元にスラックスがストンと落ち、靴下留めに吊られた靴下や華奢な膝があらわになる。こうなってから慌てたのでは間に合うはずもなく――。

「いや…っ、！ぁああ……っっ♡♡、」

ぬぷ、と男の指が肉環をくぐり入ってくる。

びくんっと仰け反る背中。

「『いや』？嘘はいけませんね。本当はここも触ってほしかったんでしょう……？」

ゆっくり奥深くまで指は侵入してくる。

「ぁ、あぁ……♡、あ……♡♡」